

螢雪餘聞第二

15
1560
2



傳五、懷風、
比天、
可明、
也、



37 2243

1980
43

傍点、傍丸ハ
に大ノモノヲ用ヒラレタ



聞

(第二)

昭
年
月
日
氏
贈
寄

37 5543

目次
上巻
中巻
下巻



(業二)

27 5543



8本三段

目

次

合

目次表

上

- | | | |
|-----------|----------|-----------|
| 一楠左衛門尉墓塚碑 | 一長壽ノ九則 | 一虎狩 |
| 一柴野栗山ノ詩 | 一蟬丸ノ | 一獨乙人チルノ小話 |
| 一山陽講中罵起溺生 | 一羽織ノ | 一楠正通ノ話 |
| 一沢庵和尚ノ名言 | 一水戸義公ノ語 | 一森長見戒短慮之語 |
| 一勸進相撲ノ | 一太宰春臺ノ小話 | 一假山ノ |
| 一とんぼうのこと | 一道場飴ノ奇談 | 一宗祇法師小話 |
| 一賀茂ノ競馬 | 一放生會 | 一新嘗祭 |
| 一歐羅巴各國ノ演劇 | 一蜀山人小話二件 | 一明人朱之瑜話 |
| 一儀同三司ノ | 一賀茂眞淵翁小話 | 一月琴ノ |
| 一馬場退助ノ話 | 一玉垣額之助小話 | 一雪踏ノ |
| 一頓阿 | 一鴻臚館ノ | 一車善七ノ傳 |
| 一宗惣ノ話 | 一懷丙ノ話 | 一雪隠ノ |
| 一馬山聞見記 | | |

下

中

幸不幸
曰一轉運
步妙甚

幸不幸雖異其功未嘗不同也夫大職冠回天之績偉侯此之左衛門尉
父子之大節彪炳與日月並懸存綱常於無窮者未知其孰愈故曰其幸
不幸雖異其功未嘗不同也益既歸正臣復來促乃拳前言告之且曰方
今夷狄猖獗九重宵旰士效方國家之秋也或成則爲大職冠廟食於
百世不成則爲左衛門尉死節垂名於竹帛豈非大丈夫平日之至願乎
正臣躍然起曰是可以表左衛門尉髦塚矣遂書以與之正臣仲相稱監
物世仕紀藩楠中將十八世之裔也慶應紀元冬十月大和森田益撰
塩谷世弘曰不爲噲咤澎湃之響而發清冷幽深之意是固得大和山
水之清音者丙寅花月旬二日之夜燈下力疾閱
林長孺曰借藤公拂敘照映又及今日夷狄之患層々敘來轉換有法
遂到於作碑之故構思巧妙文有精采非鉅匠不能至此敬々服々
又曰小楠公紹述先志精忠大義卓絕千古此文顯其功而勵士節有
碑世道不少矣謂之文壇楠氏可豈啻文冠海內耶
金石文字莊重ノ体ニハ官銜ヲ具シ正シク記ス可ハ勿論ニテ彼

護

護國社中ノ如ク古書辭典ヲ截取リ悉ニ地名官名ヲ改メ書クハ
杜撰可笑ナレト又文ニ臨ミテ誦讀句調ノ可否ヲ不顧シテ長
長シキ官名ヲ毎句ニカキ連ヌルモ亦非也蓋句調ノ可否ハ自然
ニ出ルモノ故和文モ漢文モ同シ也譬へハ保元物語平治物語
源平盛衰記等ニ左馬頭ヲ頭殿左兵衛佐ヲ佐殿又ハコウトノ
スゲノツボ云類唐書宋史等ニモ尙書令ヲ令公資政殿大
學士ヲ大資ト呼處アル類皆其文勢語路ニ隨テ稱呼ヲ異ニス今
北篇起首ヨリ謹嚴ノ体ニ書ナシタレハ彼佐殿頭令公大資等ホ
略稱ハ用ヒ難ケレト其人ヲ指ス處毎ニ左衛門尉ト書テハ口調
ニ便ナラス公トカ君トカ一兩字ニテ相当ノ文字ヲ下ス可シ試
ニ見ヨ唐宋以來諸大家ノ集ニ碑銘墓誌數多アル中ニ大尉學士
將軍中丞ノ類ハ其儘用ヒタレト同平章參政御史裏行大理評
直判長々敷官名ヲ一篇ノ内ニ始終書連テタルハ絶テナシ清孺
ノ集ニハ金石文ニモ滿州ノ複姓ヲ截略シテ尹公公袁公ナト



書タル處アリ是ハ正体ニハ非サレト夫ニテ西土ノ文人文ニ臨
 テ口調ニ心ヲ用ユルヲ見ツヘシ近世頼翁ノ外史ニ侍從少將
 内大臣其時ノ官爵ヲ以テ東照公ヲ呼ビシハ史漢本紀ニ沛公
 漢王等ト稱セシ例ニ據テ名分ヲ謹ミ更實ヲ見ラハシ徂徠竹山
 輩ノ濫稱ヲ改メシカ爲メノ筆法ナルヘシサレト彼ハ編年ノ史
 筆此ハ座磐一更ヲ記スル文ナレハ体裁各別ニ^{イテ}的例トハ爲ス
 可ラス

且遊二山ノ句後面藤楠二公並論スルノ種子ニシテ讀者皆一字
 千金ト稱贊スヘケレト愚ハ則謂ラク不然ト其故如何トナレハ
 此篇小楠公ノ忠烈ヲ尊崇シ起筆ニハ正統ノ年号ヲ揭次ニ賊冠
 スト書テ以死節予之カ、ル忠賢ノ遺跡ヲ表スルハ盛舉大典
 ナレハ其文ヲ乞ニ來ルヤ辭スルモ諾スルモ正襟歛容等謹肅ノ
 語ヲ用ユヘキニ尋常園亭ノ記詩文ノ序ヲ求ムル者ニ應スル如
 ク且待杯輕鬆ノ筆ヲ下シテハ王公大人ノ前ニテ爾汝ノ詞ヲ使

一字下

フニ似タリ体裁イカバアルヘキ

其爲遺跡四字ヲ削去リ也ノ字ヲ補ヒ過者或不知也ニ改作ル可
 シ後文欲求其遺跡ノ句ト複筆ヲ避ル爲メナリ夫大職冠云々ノ
 句ニ夫固ノ字然ノ字ヲ補ヒテ夫大職冠固回天之績偉矣然比之
 云々ニ作可シ若シ矣ノ字無レハ然ノ字ヲ下スニ不及矣字アレ
 ハ直ニ比之ノ句ヲ以テハ承難シ是等ノ虛字ハ邦文ニ所謂テニ
 ナハナル者一字苟不可下

首段ニ建石欲以表左衛門尉馨塚ノ句アリ此篇中更ニ別人ノ馨
 塚ハ有マシ左衛門尉ノ四字ヲ削リ是可以表馨塚矣ニ作リテ可
 ナリ

全篇小楠公ヲ主トス此處中將ヲ揭挙ルニ不及且タトヒ中將ヲ
 掲ルモ楠ノ字ヲ用ルニ不及楠中將云々ノ句蓋左衛門尉十七世
 之裔云々ニ作可シ

世ニ大家先生トテ衆人ニモテ囁ス文集ヲ閱スルニ珍敷論ヲ吐

傍ハツル

一字下

キ古ノカ敷詞ヲ綴リ一通リ面白ソウニ見ユレ細心ニ之ヲ讀ハ
 ハ篇法モナク章法モナシ甚敷ハ前後脈絡不貫徹處アリ而ルニ
 作者自許シ評者之ヲ贊揚スル可笑ノ甚キニ非スヤ獨此節齋
 翁ノ文ハ百練千磨格律正敷手段巧ニノ愈讀愈妙是ヲ誠ニ能作
 文能知文ノ人ナレハ今此未評ノ如皮相ノ諛辭ヲ下テハ恐クハ
 翁ノ喜ヲ有マ敷也余雖不敏多年此道ニ苦心シタレハ矮人觀
 場人ノ譏笑ニ從フ不能聊鄙見ヲ直書ノ佗日面謁請益ノ媒ト爲
 ントス讀者願クハ之ヲ翁ノ許ニ轉致シ玉ヘカシ

丁卯仲春

江小史川田剛識

余之ヲ友人矢吹氏ヨリ聞知シ考フルニ此文ヤ彼林塩谷等ノ大家
 スラ尙ホ其非ヲ拳ル能ハス頗ル之ヲ贊揚セリ況ンヤ斗筭ノ書生
 輩川田先生ノ駁論微セハ烏クンソ其非点ヲ知ルヲ得ンヤ先生ノ
 卓見驚ク可ク伏ス可シ森田先生ノ之ヲ聞テ皆之ヲ用ヒシモ故ア
 ル哉宜ナリ明治ノ今日ニ至リ世論川田先生ヲ明治碩儒ノ泰斗ト

仰ク

長六

長壽ノ九則

第一則

身体ヲ清潔ニスル

皮膚ニハ無數ノ細孔アリテ体内ノ穢物ヲ吐出スモノナレハ
 身ニ垢付ケハ夫力爲ニ孔ヲ塞キテ諸症ノ病氣ヲ惹起ス力故
 ニ毎日朝晩ニ濕シタル手拭ニテ全身体ヲ拭キ垢ヲ付ケ置カ
 サル様注意スヘシ

第二則

毎日廿四時ノ内八時間ハ寢ニ就ヘキ

母親若シ小供ニ泣カレ夜間充分ニ眠得サルハ晝間ニテモ
 暫ク眠ルヘシ僅ニ十分時ニテモ良キ藥ヲ用ヒタル如ク心地
 ヨクナルモノ也又小兒ハ自分ニテ目ノ覺ル迄寢カシ置キ決
 テ無理ニ喚起ス可ラス

第三則

霧雨其他流行病アルハ朝飯前空腹ニテ外出ス可ラサル

若シ已ヲ得スノ外出スルハ猪口一杯ノ牛乳ヲ沸湯ニ入ル
ルカ又ハ雞卵一箇ヲ能ク攪和シテ熱湯ヲ澆キ砂糖ノ如キニ
モノニテ味ヲ付ケ茶碗一杯程モ飲メハ氣力増シテ惡シキ毒
ノ氣ヲ受クナシ

第四則

食過キサル様注意スヘキ
食支ノ節今少シ喰ヒ度處ニテ止ルヲ佳シトス皿ニ殘リタル
モノ長ク置ケハ腐ル杯ト思ヒ無理ニ食ヒ尽ス可ラス強テ食
スレハ必ス胃腸ヲ傷メルモノナリ世ニ云フ一文惜ミノ百文
損トハ此等ノナルヘシ

第五則

身体ニ適セヌ食物ヲ食フ可ラサル
夕飯ニ消化シ難キモノヲ食ハヌヲ良トス何トナレハ寢り時
ニ近ケレハナリ朝起テ少シ空腹ヲ覺フル位ヲ宜シトス

第六則

晝間身体ニ着ケタル下着ハ夜ニ至テハ必ス脱キ替ユヘシ
折々日向ニ出テ新ラシキ空氣ヲ吸フ可キ

第七則

王侯貴人ノ家内ニノミ在テ色青サメ天死スルハコトニ注
意セサルニ由ルモノ多シ富豪家ノ婦人方杯ハ最モ氣ヲ付可
可キナルヘシ

第八則

常ニ心ヲ慰ムルニ注意スヘキ
毎日常ニ籠リ箒盤ヲ執リ簿冊ヲ披キ氣力ヲ使フノミニテ
ハ身体弱ルモノナレハ文字アルモノ間ニハ詩ヲ作り文ヲ
草シ心ヲ慰ム又文才ナキモノハ面白キ(猥褻ニ涉ラサル)
新聞奇話ヲ視聽シ又ハ庭園ニ美シキ花卉ヲ植ヘ鳥魚ノ類
ナト飼ヒテ慰ミト爲スモヨシ

第九則

平和ニ生活スヘキ
人ノ失誤ヲ探リ喧嘩ニ立入ル等有害無益ナルニ心思ヲ
徒勞セサルヲ肝要ナリ儼シ之レ等ニ注意セサレハ肝臟ヲ
傷ヒ血液ヲ惡シクシ腎臟ヲ膨脹セシメ命數ヲ縮ムルモノ
ナリ

右九則ハ米國某新聞ニ掲ケアリシテ農業雜誌ニ譯シタレハコ、
ニ載セシナリ

虎狩

薩藩ニテ童兒ヲ教フルニ未タ四書小學ヲ讀マサルノ前ニ先虎狩
ヲ讀マシムト云フ維新ノ初メヨリ戰鬪征伐ノアル毎ニ薩人ノ勇
敢死ヲ輕ニスル諸藩ノ士ニ勝レタリ是虎狩ヲ助ケテ爲ス多
キニ由ル其言淺薄深味ナシト雖モ其意ハ專テ兒童ノ勇氣ヲ勵マ
ス力爲ニ作リタル者ナリ
文祿元曆壬辰歲太閤秀吉公我朝の諸將を催し朝鮮國を征ち玉ふ
これ由て島津修理太夫義久ノ舍弟義弘息又八郎忠恒父子相共
ニ薩隅三州ニ銳兵數万を引率し八重の汐路ヲ渡り彼地ニ年を
經寒暑風雨を厭はず常蛇鶴翼の陣ヲ展テ折々の軍志莫大の功名
異國本朝ニ露顯せり加之同三年ニ冬秀吉公虎乃肉藥方ニ用ある

より虎狩をして肉を可拜之由木下大膳太夫淺野彈正少弼の奉
書翌年正月到來り時しも積雪山を埋み雉兔芻蕘の遍ひや心
任せず況や虎狩に於て如月過雪も消て漸く落氷路踏み彌生八
日唐島の湊々纒を解き彼國の昌原と叫べる所一舟ヲ寄て史編の
トニ及はされハ勞を不休同九日狩場ニ打出れらる形勢ハ陷穽
此固めより猶まさりて圍みぬ然はあじとも深山遠く住ものな
れハ輒々狩出り事なし翌十日尙深々分に入り險阻をさし最
を起し岡谷をどよまし數千人の列卒の聲天ヲ響きて狩ける俄
雨降來て前後を弁せり徘徊する所猛虎一つ走り出後あしこ
は駈廻り既ニ圍を出行島津守右衛門影久の郎等安田次郎兵衛
迄懸れハ立戻り喰はんとい其時虎の口ニ刀を貫き目の下ニ切殺
あハ馮婦の恥を擧げて向ひまゝも異なれり暫ありて又二つ出
け人皆是を見て義弘忠恒此立所近く馳せ來りぬんと肝を消りか
かりける所忠恒ハ老父義弘の急あゝん事以危し香が虎に跨

りし心地あて暴虎馮河の死を畏ま給ハハ馳向ハんとの氣色見え
し忠恒の舍人上野權右衛門といへる若者馳懸て切らんとす則
渠をあり殺し牙をかき五間計る程投落し愈威を振ひ山に靠て嘯
くを帖佐六七捕へんと勇まかき忽ち向ひ何ふ頭を三刀切り
直に喰懸て股に噛み付き危く見ゆる福永助十郎虎の尾を取て
松の下枝に引くれハ時を移さず永野助七郎續き合ひ終に切り
殺しぬ誠は彼人々の働きハ子路の勇をも欺くへし其中に六七ハ
股痛みて程なく死す今一つの虎ハ圍みを破り出たり儲得物の
虎二つ在本へ渡れりまハ於殿下貴賤を褒美不斜殊更感激の御
朱印を賜り今に櫃に藏めて子孫に傳ふ文書の中に其事の迹
丹青の手は附あ寫し出えて名を止む後の人圖画に對して英氣を
發せざるものハ何ぞし

柴野栗山ノ詩

栗山學博經富才識絶一世其文壯快俊逸筆鋒無敵詩不留意然亦往
往有名作在京時嘗与渠園步月過昌明門栗山唱日上死清風散桂香
昌明門外月如霜既而遙聞糸竹之聲乃再吟曰何人今夜清涼殿一曲
霓裳勸御觴渠園嘆賞以爲天來續先哲叢談
唐南朝元帝諱玟延基トイヘリ延基ノ三男繼祿ノ子ヨリ啞ニテ
其上瞽タレハ遂ニ是ヲ相關ト云フ處ニ棄玉フ此子ノ名ヲ彈兒ト
云フ如何トナレハ幼年ヨリ琴ヲ能ク彈セリ故ニカク名付ケシナ
リ今此玟ニ依テ日本ノ彈丸ノヲ考フルニ延基ト延喜トキノ字
ノ音同シ彈ノ字彈ノ字ト形相似タリ又相關ト相坂關モ相似タリ
又延喜ノ子ヲ捨サセ玉フト彼是同意ナリ恐クハ古シノ人唐ノ元
帝ノ故玟ノ書タル物ヲ日本ノト見誤マリ書傳ヘシナルヘシ彈
兒歌ヲハ古史略卷三十三ニ見エタリ又扶桑仙歌集ノ中ニ彈丸ハ

彈丸ノ子

山科ノアタリ賤男ノ子ニ相坂ノ關ノ邊ニ庵ヲ結ビ往來ノ人ハ
情ケニヨリ露命ヲ繫キシトアリ

獨乙人チルノ小話

獨乙人チル、チイレンス、ピーケル或ハ帝ニ從テ山谷ヲ回クル
昇路毎ニ悦ビ降路毎ニ歎ク帝其故ヲ問フチル答曰上ハ下チ生シ
下ハ上チ生ス上レハ下リノ休フヘキヲ樂シム下レハ上リノ苦ヲ
思フ故ニ歎クト帝大ニ感賞セリチル死スルノ後帝此語ヲ永世ニ
傳ヘントテ爲ニ石碑ヲ建ツ其詩ニ曰ク幸ニ臨テ慎ムヘシ不幸ニ
臨ンテ歎ク勿レチル是百世師幸福ヲ幸福トセス不幸ヲ幸福トセ
リト是碑百餘年前佛兵此地ニ進撃シ碑ノ金文字ナルヲ見テ毀チ
奪ヘリト云フ

山陽講中罵起溺生

賴山陽一日講左氏傳會一書生忽離席山陽問曰足下何往對曰將溺
山陽叱曰咄每侍講筵必起是足下宿癖也蓋茲聽講預上廁而不爲此
無禮昔織田右府与一部將講武蒲生氏郷在坐而起溺右府激怒叱氏
郷曰講武士之重更也若欲溺亦可矣今足下蓋坐溺乎生慙懼謝罪

羽織

世俗貴賤ノ別ナク羽織ト稱スル者チ着ス四太曆ヲ按スルニ承久
ノ兵乱ノ後公卿大ニ窮シ衣服調度等意ニ任セス勿論車馬ハ弥不
隨意ナレハ衣冠束帶ノ御方モ歩行シ玉ヘハ晴レノ服ニ塵埃ノ蒙
ランヲ厭ヒ衣冠杯ノ上ヘ明衣杯ノ服チ上張り歩行シ玉フ故ニ
道服ト云フ其上張ノツマノ地ニ曳クヲ折りテ挾ミ玉フ故服折ト
稱スト云々(東陽子)

楠正通ノ話

史館茗話曰楠正通關東下向ノ近江ノ湖ヲ眺テ一句ヲ得テ蒼波
 路遠雲千里ト此對句ヲ賦セント按シ煩フ趣向浮ハス道スカラ意
 ナ碎キ箱根山ニ到リシ正通カ娘歌ヲ詠シテ
 道遠く雲井見るへき深山路又とときぬ鳥の一聲
 正通是ヲ聞テ忽チ對句ヲ得テ曰白霧山深鳥一聲ト右ハ了訓抄
 著聞集江談抄等ニ見ヘタリ嵯峨ノ釋迦ヲ取來リシ齋然ト云フ僧
 入宋シテ此句ヲ我力作トテ鳥一聲ヲ虫一聲雲千里ヲ霞千里ト直
 シテ見セケレハ宋人曰甚可ナリ惜ラクハ虫ヲ鳥トシ霞ヲ雲トセ
 ラレナハ弥可ナラント云ヒシトソ

沢庵和尚ノ名言

稻葉濃州勤ノ暇ナカリシニ或ハ品川ノ東海寺沢庵和尚訪尋ラレ
 シカハ濃州和尚ニ向ヒテ云ケルハ勤任ノ長日ニ退屈セサル様ノ
 教諭ヲ乞ヒ玉ヒシカハ和尚言下ニ筆ヲ採リテ無再此日寸陰一尺

壁
 淺ましや思ヘハ日々ノ別れなきのぬれふまたもほはねハ
 濃州此作ヲ讀ミ深ク感シテアリシヨリ永日長夜ノ退屈ナカリシ
 トソ

水戸義公ノ語

仁過レハヨハクナル義過レハカタクナル禮過レハ詔ラヒニ
 ナル智過レハウソチツク信過レハ損ヲスル

氣は長く勤はあましく色うけく食細ふして心大きく

森長見戒短慮之語

一ニハ後悔アリ二ニハ物クルシ三ニハ其愚アラハル四ニ
 ハ智アル人親マス五ニハ他人ニ仇ノ思ヲナス六ニハ器ヲ減

ス、七ニハ病ヲ生ス、八ニハ争多シ、九ニハ苦勞多シ、十二ハ衆惡發ス猶此外ニモ失多シ

勸進相撲ノ

正保二年六月山州干菜寺八幡宮再建ニ下鴨會式ノ内十日間興行ス是レ京都勸進相撲ノ起リナリ江戸ハ寛永元年明石志賀之助相撲ト名ケ四谷塩町ニテ晴天六日興行ス是レ始メナリ大阪ハ元祿五年袋屋伊右衛門ト云者南堀江高木屋橋筋立花通りニテ始メテ興行ス

太宰春臺ノ小話

太宰春臺ノ護門ニ在ルヤ自ラ孔門曾顔ノ地ヲ以テ居リ徠翁ノ羽翼トノ最モ名望アル藤東野縣周南諸子ヲ動モスレハ凌轢スル色アルヲ以テ徠翁常ニ悦ハス而シテ春臺モ亦其己ニ与ヘサル所ア

ルヲ知リ心窃ニ之ヲ悲ル自ラ謂ラク吾學治經ノミナラス文藻ト雖モ豈又東野南郭輩ニ讓ランヤト是ニ於テ變幻無窮ノ技倆ヲ示シ併セテ諸子ノ眼識ヲ試ミント窃カニ古文ニ擬シ產語十二篇ヲ著シ傭書ニ付シテ故紙ニ謄寫セシメ故サラニ撰者ノ姓名ヲ題セス之ヲ周南ニ示シ欺イテ曰ク余此書ヲ浪華ノ市考ニ獲タリ傳ヘテ云フ東大寺ノ古藏ニ出ルヲ寫セルモノナリト文辭ノ古雅ナル秦漢以前ノ撰タル又疑ヲ容レサルナリ然レモ漢ヨリ以來歷代ノ藝文經籍志ニ於テモ一ノ產語ノ名ヲ載セス蓋シ古書ノ中夏ニ逸シテ我邦ニ存スル者頗ル多シ古文尙書孝經ノ如キ其昭々タルモノナリ而シテ書中多ク管宴李悝白圭等ノ語ヲ錄スルヲ見レハ豈其管宴李白ノ徒著ス所ニノ彼ニ逸シテ我ニ存スル者ナラサルヲ知ランヤ子以テ如何トナスト周南應ヘス先ツ卷ヲ開イテ讀ム少時歎ノ曰ク是レ奇書ナリ實ニ秦漢ニ下ラサルモノナランカト

携へ歸テ南郭亦悦ンテ曰ク眞ニ奇書ナリト乃チ之ヲ徂徠ニ示ス
徂徠瀾讀數篇眉ヲ顰メテ曰ク辭句淡ナリト雖モ歸旨純ナラス或
ハ弇州輩ノ戲謔ニ成ル者カト讀テ臯賓篇ニ至リ卷ヲ釋テ噤然ト
メ笑ツテ曰ク德夫ノ人ヲ弄スルモ亦甚イ哉然レニ渠ニメ能ク此
魅術ヲ逞シクスルヲ得タリ余ニ非レハ其妖ヲ摘發スル莫能ハサ
ルヘシ則護門ノ一書生タルニ恥チスト云フヘキノミト是ニ於テ
周南々郭皆其卓識ニ服シ且ツ其及ハサルヲ慚ツト云フ

假山ノ

推古天皇二十年百濟國ヨリ化來者アリ其面身皆班白ニノ白癩ア
ルカ如シ其人ニ異ナルヲ惡ンテ海中ノ嶋ニ棄テントス然ルニ其
者曰臣カ班皮ヲ惡ミ玉ハ、白斑牛馬國中ニ畜フ可ラス又臣小才
アリ能ク山岳ノ形ヲ構フ若シ臣ヲ留メテ用ヒハ則國ノ爲ニ利ア
ラン何ソ空シク海嶋ニ棄ンヤ是ニ於テ其辭ヲ聞テ已ニ仍テ須弥

山ノ形及ヒ吳橋ヲ南庭ニ構ヘシム時ノ人其人ヲ号テ路子工ト云
亦芝耆摩呂ト名ク是假山ノ始メナラン(和支始)

靖艇をとんぼうといふハ吾邦の名以津洲ト云ふゆへ東方とい
ふ事なり(可成談一)

道場飴ノ奇談

余カ有馬温泉ニ入浴セシ其暇ニハ必ス同地ノ老農等ヲ集メテ
談話シ以テ閑日ヲ消セリ或日談近村道場村里温泉場ノ北一ニ及フ
一人進ンテ其地ノ產物水飴ノヲ話ス曰ク昔豐太閤ノ未タ志ヲ
得サリシ織田勢ノ將トノ毛利勢ト戰ハントノ攝州ヲ過キ道ニ
シテ一城主ノ爲ニ臆セス惜ム可シ要撃セラレ數日對峙シテ拔ク
能ハス躬ラ一卒トナリ地勢ヲ察ス道場村ニ至リシ頃飢渴ニ堪ヘ

ス一ノ茅屋ニ入り水ヲ求ム一老^媼アリ云ク屋後冷泉アリ行テ飲メ
ト又食ヲ乞フ云ク寒村一ノ飢ヲ救フ可キナシ土産ノ水飴ヲ勸ム
可シト一ノ曲^モ物ニ一箸ヲソヘテ出ス秀吉之ヲ見テ怒ツテ曰ク咄
汝武士ニ對シテ無禮ヲナス一箸何ソ物ヲ食ス可ケン媼曰ク過テ
リ我未タ二箸以テ飴ヲ食セシヲ聞カス何ソ片端ヨリ卷取テ食ハ
サル秀吉之ヲ聞キ手ヲ拍テ喜ンテ曰ク片端ヨリ卷取テ食ヘノ一
言實ニ武士ニ取テ好キ訓誡ト云フヘシ我ハ豊公部下ノ一卒ナリ
今汝ノ一語ヲ聞キ大ニ悟ル所ロアリ常ニ此一言ヲ心ニ藏ムレハ
戰何ノ難キフ力之レアラン歸リテ之ヲ上申セハ公ノ喜ヒヤ知ル
可シ若シ戰利アラハ我ヨリ上奏シテ媼ニ幾干ノ褒ヲ与ヘン汝金
穀ニ意アルヤ將タ他ニ望ム所アルカ媼其言ヲ解スル能ハス沈黙
少時答テ曰ク飢テハ粟ヲ食ヒ渴シテハ水ヲ飲ム樂之ニ過ルナシ
又何ヲカ望マン秀吉益ス之ニ感シ問テ曰ク汝子アリヤ曰クアリ
常ニ馬夫ヲ以テ業トナセト天性魯直ニメ人ニ欺カル、丁多シ多

宗祇法師小話

分ノ賃錢ヲ得ヘキ運送物ハ皆他ニ占有セラレ僅ニ其殘物ヲ運フ
ニ過キスト媼ノ質朴ナル話ヲ聞キ曰ク然ラハ我他日汝ニ此憂ナ
カラシメント約シテ去ル後忘テ得ルニ及ヒ制ヲ立テ馬夫等ヲメ
恣ニ好運送物ヲ占有セシメス故ニ媼ノ子モ亦相当ノ利ヲ得ルニ
至レリ又媼ノ家ハ代々田租ヲ免シ別ニ畠地若干段ヲ玉ヒ製飴田
トナシ年々水飴ヲ製シテ奉ラシム媼始メ秀吉ノ語ヲ聞テ毫モ信
セス又意トモセサリシカ此令ヲ得テ且ツ驚キ且ツ喜ヒシト云フ
後徳川政府ニ至レ氏此獻上飴ノハアリシト云フ且ツ此冷水ハ
今日ニ秀吉水ノ名ヲ存シテ涌出ヲ斷タスト云フ

宗祇法師諸國ヲ行脚シテ或所ニ至リシニ藥師堂供養ノ爲連步會
アリト聞キ所望メ其座ニ列レリ時ニ上座ノ宗匠ト覺シキ人先ツ
筆探リテ「新ラシク作りタテタル藥師堂カナ」ト會釋モナク懷

紙ニ書テ示シタリ祇是ヲ見ルニ發句ノ体ニハアレト時節ノ季モ
聞ヘス文字モ餘リタレト一座ノ者賞感ノ狀ナリケレハ口ヲ籍ミ
テ居シニ旅僧ニト脇ヲ望ミシカハ「モノヒカル露ノ白玉」ト吟
シケレハ宗匠打笑ヒ僧ハ連歌未熟ナリ二字足ラヌ附句ヤアルト
嘲リケレハ祇答テ連歌ハ歌一首ヲ上下ニ分タル物ト承ルニ發句
既ニ二字餘レハ附句ハ其意ヲ得テ「新ラシク作りタテタル藥師
カ九物ヒカル露ノ白玉」ト續タリト云ケレハ宗匠赤面シテ詞ナ
カリシトソ

賀茂ノ競馬

五月五日賀茂競馬ノ神夏ハ堀河院勅願成就アリテ天下ノ御祈ト
寛治七年ニ始テ行ハル由賀茂大神宮記ニ見ヘタリ（和夏始）

放生會

宣

八月十五日ニ行ハル。夏ナリ鴨長明カ文字鑑ニ云元正天皇ノ御
時養老四年ノ秋ノ比大隅日向公ニ從ヒ奉ラヌモノ共有シカハ宇
佐ノ宮ノ祢宣旨ヲ承リテ軍ヲ起シテ彼等ヲ打平ケキハニ託宣シ
玉フハ軍サニ多ク人ヲ殺セリ放生會スヘシトノ玉ヒシカハ是ヨ
リメ國々ノ放生會ハ始マリシ也（和夏始）

新嘗祭

新嘗祭ハ本年ノ新穀ヲ天神地祇ニ奉ラセ玉フ嚴儀ニ所謂御親
祭ナリ日本紀ニ天照大御神ヨリ起レル由見ヘタリ二千年以上ノ
典故今ニ聯綿タルハ誠ニ目出度ナリ太古ヨリ本邦ヲ瑞穂國ト
稱シ稻禾産他方ニ超タルハ豐受大神鎮坐ノ外宮始メ諸神ノ恩ナリ
ト云フ義ヲ以テスルナリト云フ歴朝御代ノ初ニ行ルヲ大嘗會
トシ特ニ鄭重ヲ加ヘ毎年ノ新嘗祭トス昔ハ全國ノ民此日ハ戸
ヲ閉テ齋戒ノ籠リ慎ミシ狀古歌ニ見ユ又此翌日豐樂殿ヘ群臣ヲ

おふ松花
26
立節トテ
ユ人ノ舞
姫ヲ舞曲ヲ
奏セシモ
当日ノ儀
ナリトナ
ス

集メ御宴アルヲ豊明節會ト云此ハ本年ノ新穀ヲ製メ酒飯トセシ
ヲ神ニ奉リ天皇モ聞食シ群臣ニモ給リテ上下歡ヲ尽スノ旨ナリ
ト云フ
歐羅巴各國ノ演劇學藝叢談
往古希臘國ニ一紀元前五百三十六年日本紀元百二十年「セス
ピス」ト云フ人アリ其國民等葡萄ノ成熟ヲ祝ヒ酒ノ神「バキユ
ス」ヲ祭り酒筵ヲ設クルハニ當リ座中ヨリ能弁ニメ滑稽ヲ善ク
スル者一人ヲ撰ミ種々「ヲ演說セシメ神タイサメ諸人ヲ愉マシ
ムル」ヲ發明セリ是ヲ歐羅巴演劇ノ濫觴トス其後「セスピス」
一個ノ車ヲ製シ演說者ヲ載セ諸村ヲ巡廻シテ祭ヲ助ケシメタリ
是ヲ劇柵ノ權輿トス紀元前五百年ノ頃ニ「バキユス」ノ堂中ニ
宏壯美麗ナル石造ノ劇場ヲ設立セリ後紀元前四百九十九年「エ
スキリユス」ト云フ人アリテ演劇ノ脚色ヲ改良シ假面ヲ用舞衣

ヲ著ケ種々ノ道具立ヲ用ヒ連舞ノ法ヲ發明シ二人ノ弟子ヲメ之
ヲ興行セシメタリ故ニ演曲ノ父（我國ニテ元祖ト云フカ如シ）
ト稱セラル其後亞典ノ民ニ「ソフォクリース」ト云フ者アリ三
人ノ弟子ヲ「連舞セシムルノ法ヲ始メタリ此「ソフォクリース」
カ著作ナル一詩ヲ演劇ニ用フル爲ニ築造セシ劇場ハ壯大ヲ極メ
美麗ヲ尽シ其建築費用ノ巨額ナル五十万圓ニ至リシト云フサテ
「ソフォクリース」ハ此ノ如ク世ニ寵用セラレシカ紀元前四百
六十九年ニ或ル一少年ト劇曲著作ノ巧拙ヲ爭ヒタリシニ勝ヲ取
ル「能ハサリシカハ甚タ慚悔シテ遂ニ他邦ニ隱匿セシトカヤ希
臘ノ劇場ハ毎ニ山ノ側ニ築キ觀客ハ高キニ居テ瞰下スルヲ例ト
ス劇場ノ周圍テ柵ヲ結ヒタル計リニテ遮蔽ナシ場後ニ半球形ノ
長房アリ觀客雨ヲ避クルノ地トス場中二三万人ヲ容ルヘシ演劇
ハ早晨ヨリ初リ薄暮ニ終ル觀客各自ニ座蓐ト飲食ヲ携ヘ來ル戲
曲ノ題名ハ常ニ古昔神人ノ事蹟ニメ毎日四齣ヲ奉ス一齣ヨリ三

齣迄ハ時代モノニメ末齣ハ打諢トス演劇終レハ裁判役アリテ四
 齣ノ甲乙ヲ品評シ賞品ヲ頒チ与フ元來希臘ノ演劇ハ神ヲ祭ルヲ
 主旨トスル故「コロス」トテ祭神ノ歌ヲ誦スルモノアリ優人ハ
 皆男子ニシテ女子ナク且政府ヨリ扶持セラルヲ以テ社會ニ尊敬
 セラル又歐羅巴諸國ノ戯曲作者ハ常ニ人ノ爲ニ貴重セラレ一國
 社會ノ最上等ニ齒スル「ハ古今皆同シ羅馬ニテ演劇ノ始リハ紀
 元前三百九十一年ニ在リ而シテ其最モ盛ナルト雖モ希臘ニ對
 抗スル「能ハス蓋シ羅馬ノ人ハ慄悍殺ヲ好ムニヨリ演劇ノ高尙
 ナル感覺ヲ味フ「能ハサル故ナリ羅馬ノ優人モ亦男子ノミニメ
 女子ハ幕間ニ一種ノ技「本邦ニ所謂能ノ間狂言ノ如シ「テ演ス
 ルノミ紀元前五十八年羅馬ニ築キタル劇場ハ三層ノ高宇ニノ下
 増ハ大理石ヲ敷キ二階ハ硝子ヲ敷キ三階ハ材木ヲ敷キ金泥ヲ以
 テ之ヲ塗リ場中三百六十柱アリ觀客八万ヲ座セシムト云フ
 羅馬滅ビテ演劇モ亦隨テ廢レ世ノ中暗クナリシ間ハ又演劇アル

後編

倭

「テ開カス紀元千二百年代ニハ王侯饗宴ノ席ニテ假面ヲ冒リ踏
 舞ノ興ヲ添ル「ヲ業トセシモノアリ又ミステリトテ寺院ノ神
 祭日ニ當リ其寺院ニ劇棚ヲ設ケ僧官自ラ優人トナリ古聖ノ問答
 應接等ヲ演說セリト云フ近世歐羅巴ニテ演劇ヲ始メシハ紀元千
 六百年代ノ「ニテ當時伊太利ニ「アリオスト「及「マキヤベリ
 「一等ノ戯曲作者彬々輩出シ希臘ノ演劇文字ヲ恢復セリ又英國
 ニ演劇ノ聖「セ「クスベール「ト云フモノ出テ演劇ノ法ヲ改良
 シ近世演劇ノ体全ク備リ就中歴史演劇最上点ニ達シタリ又伊太
 利人「ロ「ブデベカ「ナル者隱謀暗殺等ヲ支贖テ演劇スル「テ
 初メタルニ佛人之ニ倣ヒ又大ニ改進シ「モリユ「ニ至テ最上
 点ニ達シタリ又同時代ニ伊太利人「リスユシニ「ト云フモノ
 歌謡ト音曲トヲ合セテ演劇スル「テ初メタリ方今ノオペラ是ナ
 リ紀元千八百年代ノ初ニハ男女ノ情ヲ綴リタル戯曲ヲ演スル「
 盛ニ行ハレ此一邊ニ傾斜スルニ至レリ其後獨乙國ノ作家「ゴニ

チー「シラー」等起リ戯曲ノ文章是ニ至テ精巧ヲ極メタリ
 方今演劇ノ種類ヲ大別シテ七種トス一ニ曰ドラジヤチ一ニ曰
 コメディー三ニ曰メロトラマ四ニ曰フアールス五ニ曰ヴァウチビ
 ル六ニ曰ハントマイン七ニ曰ヂペラ是ナリドラシヤチハ戰國
 生殺ノ支續ヲ演スルモノナリコメディーハ江湖ノ珍々諧謔ヲ演スル
 ルモノナリメロトラマハ演劇ニ歌謡ヲ交ユルモノナリフアール
 スハ芝實ニ過キタル珍々諧謔ヲ演シ觀客ノ頤ヲ解カシムルモノ
 ナリヴァウチビルハ諧謔中ニ諷刺ヲ含ミタル歌謡ヲ交ヘテ演劇
 スルモノナリハントマインハ言語ヲ用ヒス唯音樂ト態度トヲ以
 テ演劇スルモノナリオペラハ歌謡ト音樂トヲ協セテ演劇スルモ
 ノナリ
 演劇ハ音樂ト能弁ト彫刻ト圖畫ト歌舞ノ五大技藝ヲ集メテ大成
 セルモノナレハ之ヲ技術中ノ最上トスルモ虛言トセス優人ハ一
 時ニ心思ト身体トヲ勞スルモノニテ平素新曲ノ舞樣ヲ學得シ又

旧曲ノ舞樣ヲ復習シ之レカ爲毎日平均四時間ヲ費シ又毎朝下稽
 古ニ二時ヲ費シ夜ニ至レハ舞臺ニ上リ四時乃至五時ヲ費ス故ニ
 優者ノ勞劬勉強スルヲハ社會中ノ最勉強者ト云ンモ誰力之ヲ過
 キタリトセンサレハ此勉強上ヨリ得來ル一ノ幸福アリ常ニ身体
 ヲ運動シ大聲ヲ發スル故其起居自然ト養生法ニ適ヒ無病長生ナ
 ルモノ多シ中世天主教ノ僧徒大ニ演劇ヲ惡ミ俗ヲ乱シ神ヲ瀆ス
 トメ深ク優人ヲ罪セシヨリ歐羅巴一般優人ヲ賤ムノ風起レリ近
 世ニ至リテハ此風大ニ變シ其才藝ト品行トヲ以テ之ヲ重遇スル
 文人學士ニ異ナルヲナシ上等ノ優人ハ常ニ文人學士ニ接シ王
 侯貴族ノ坐ニ陪シ社會ノ上等ニ位ス
 歐羅巴ニ婦女ノ優人始マリシハ輓近ノニテ紀元千六百六十年
 英國ニ女子ノ優人アリテ女形ヲ勤メタリ其以前ハ少年ヲ女裝セ
 シメ女形ニ用ヒタリ
 優人ノ給料ハ古今其價ヲ同フセスト雖モ方今佛國ノ優人ハ一ケ

月四圓ヨリ四十圓ニ至ル英國ニテハ一ヶ月十七圓ヨリ九十圓ニ
 至ル合衆國ニテハ一ヶ月五十圓ヨリ百二十圓ニ至ル一座ノ最上
 等ナル者頭ノ如シ座ハ一ヶ月四百圓ヨリ二千五百圓ニ至ル
 古昔英國倫敦ノ劇場ハ上等ノ椅子一脚ニテ金二十五錢中等金十
 二錢下等金三錢ナリ其頃ハ場中ニテ飲食ヲ放ニシ極テ喧擾ナリ
 シカ其後幕ノ間ニ音樂ヲ奏シ場中ニテ飲食スルヲ禁セシヨリ
 頓ニ靜整ニ至リシト云フ今ハ上等ノ座ニテ金一圓七十五錢中等
 金八十七錢五リ下等金五十錢ト二十五錢ナリ
 古昔ノ劇場ハ極メテ廣大ナリシカ近世ハ之ニ反シ上等ノ劇場ハ
 必ス大ナラサルヲトナレリ斯クナリシ所以ハ經驗上ノ定論ニ從
 ヒシモノニテ優人ノ音聲ハ十五間左右各十二間ノ距離外ニ達セ
 ス故ニ劇場ノ此ヨリ大ナルハ無用ニ屬スレハナリ方今劇場ノ最
 大ナルモノハ魯西亞ノ都府ニアルボルシヨイ座ニテ觀客五千入
 テ容ル其次ハ北米紐賓府ニテアガドミール、コフ、ミ、ジョク

ニシテ觀客四千七百人ヲ容ルヘシ佛國巴黎ノ劇場ハ如キハ其建
 築一千万圓ニシテ美麗壯觀宇宙ニ冠タリト雖モ其大サハ却テ前
 ノ二座ニ亞ケリ

蜀山人小話二件

或ル片蒲田ノ梅園ニ到リ先生筆ヲ染テ

梅さくや春乃初め此三左衛門

鐵を鎌田のとえぬいたゝか

鶯の片言ましののい

花ノ主ハ三左衛門ト云フ故ニ此句アリ扱人々寄集リテ此句ヲ見

テ是ハ珍ラ敷モノカナ如何様ニモ芭蕉ハ句アルヲ見レハ古キ梅

ナラン作ラ各此句ヲ寫ス去ルニテモ何カ集ニアルヤト宗匠ニ尋

ヌレハ宗匠モ彼ツクリ後世ノ人ノ句体ニ非ラスシヲト云フモ

名ニ恥トヤイカサマ何ノ集ニカアリシト覺ヘシカ忘レシ杯挨拶

其角

12

シテ人々多クタブラカサレタリト云フ
 又先生餘リ請フモノ、多キ故ニ下ノ如ク壁書セシト
 年頃吾カ書チ乞フ者多シ扇子團扇扁額屏風服紗唐紙和唐紙
 イヤナ羽織ノ胴裏ニ至ル迄累々トシテ果シナケレハ吾其請
 フ者ノウルサキニヨリテ上中下ノ品ヲ定ム上ハ速ニ書ヘシ
 中ハ預リ置テ書ヘシ下ニ至リテハ書可ラス若シ聞カスシテ
 預ケ置モノアラハ鼠ノ喰ムニ任セ紙ハ反古堆中ニ沈メテ永
 却浮フ瀬ナカルヘシ
 上ノ部
 一詩歌ノ心チモ弁ヘタル人
 一詩歌ノ心ハ知ラチ共甚タ是チ信ノ貯ヘ置人
 一名人ノ画ノ讀
 一表裝至テ美ニテ掛物トスル人
 一至テ美人ノ直頼中位ニテハ不承知ナリ又頼ニテハ受取ラス

中ノ部

一詩歌ノ好ミモナク何ニテモヨロシキト云フ人
 一人ニ遣ルニテモナク自ラ納メタクト云フ人
 一扇一二本短冊二三枚唐紙一二枚好ム人
 下ノ部
 一惡面惡紙和唐紙ノ弁ヘサル人
 一遠國ヘ近々旅立ツ人ニ贈ルト云フ人
 一小肴ノ價高ケレハ扇ニ書セテヤルカ徳用ト云フ人
 一何カヘ向ワカラチ共書セテ置カ徳ト心得テムセウニ書セル人
 此類婦人ニ至テ多シ
 一筋違御門内外ノ古道具屋山下アタリヘ賣ル人
 此外イヤナヲタラケニメ見ル目モウルサキヲ多シアタラ
 陰ヲ費ヤシテ欲深キ者ノ目ヲ悦ハシム忍ヒス仍テ壁書如
 件

明人朱之瑜話人

明人舜水朱之瑜至安南日館人供張甚盛舜水從容不撓安南王召見欲令拜而長揖不屈其人或以爲不解至此畫砂作一拜字以見之舜水即加不字干其上於是怒因之遂將殺而守死自誓王終感動救死以喜其義烈此舜水自錄之名安南供役紀先哲叢談

赦

儀同三司ノ

儀同三司ト云官ハ後漢ノヨリ始ル是ヨリ先漢文帝ノ宋昌ヲ用テ衛將軍トシ位亞三司儀同三司ノ漸ナリ其カミ太尉司從司空ヲ三公トス是ヲ三司ト云其後漢章帝ノニ車騎將軍馬防班三司同三司ノ名是ヨリ始ル又漢帝ノニ鄧騭ヲ車騎將軍トシ儀同三司儀同ノ名是ヨリ始ル万々ノ儀式三公ニ准スルト云ナリ晉以來又開府儀同三司ト云アリ此ハ府ヲ開テ別ニ官ヲ置ク隨文帝ノニ散官トシ煬帝ノニ從一品ノ散官トス文獻通考ニ詳ナ

賀茂眞淵翁小話

リ本朝ニ在テハ一條帝寛弘五年帥内大臣伊周公准大臣賜封戸一千戸自稱儀同三司其後久敷聞コヘテ後宇多帝弘安六年ニ大納言源基具敘一位辭大納言七年准大臣可令朝參之由口宣テ下サル清家外記補任ニ從一位行儀同三司ト註セリト何レモ職原鈔ニ詳ナリ然レハ勅命ノ名ニ非ス其始ハ漢名ヲカリテ稱シタルモノニテ遂ニ定タル官名トナル又職原位階ノ所ニ從一位ノ下ニ唐名開府儀同三司ト云ハ漢名ヲ配当シタル迄ニテ准大臣トハ各別ノ混シミル可ラス

賀茂眞淵翁始メテ江戸ヘ赴カントテ親戚古旧ヲ訪ヒ暇乞セラレシハ翁ノ幼年ノヨリ親シク交ハリタル濱松驛ノ某老人翁ヲ戒シメテ更ハ成リ難ク志ハ碎ケ易シ子カ此行モ余ニ於テハ甚タ危フシト云シカハ翁先ツ其箴言ヲ謝シサテ江戸ニ至リテ後ハ必

ス斯道ヲ振起シ身モ亦長捧駕籠ニ乗可キ程ノ顯榮ヲハ誓ヒテ受
得ヘキ由答ヘラレケレハ老人打笑ヒテ長捧駕籠ニ乗ル迄ニハ及
ハス只長捧駕籠ヲ昇カサル様ニ心掛ケラルヘシトイト懇切ニ告
ケタリシトソ後延享三年ニ至リ田安家ニ聘サレテ古學博士トナ
ラレシハ此老人已ニ物故シテノ後シカハ翁深ク遺憾カラレ
シト云フ

月琴ノ

月琴原以銅製唐景雲間有人獲諸古墳中識者以爲晉阮咸所造以木
掌之草稱曰阮又以其形類月聲似琴遂呼月琴云傳

馬場退助ノ話

荒ヲ救フニ奇策ナシト古人モ云タル如ク豫備蓄穀ノ外別ニ良方
有リ無レハ之ヲ爲スハ尤モ怠ル可ラス去レト無知ノ民ハ往々之

ヲ恃ミ米穀稍貴キヲ見レハ輒チ發メ賑サンヲ求ム其害又知ラ
サル可ラス天保申年ノ饑ニ野州日光山領ノ民二千餘人有司カ官
廩ヲ發クノ遲キヲ憤リ群起リテ奉行ノ廳ヲ取圍ミシカハ奉行始
メ蒼皇メ措ク所ヲ知ラス急ニ人ヲ馳セテ組頭筆頭ノ馬場退助ヲ
徵スニ悠々トメ出來ラサレハ各人氣ヲ焦燥テ辱ハ使テ走ラシタ
ルニ漸ク出來リ指圖メ廳門ヲ開カシメ首唱者三十餘名ヲ呼入レ
退助玄關ニ出テ問フ汝等カク大勢來リテ廳門ヲ開スハ其意急ニ
倉廩ヲ開キ救米ヲ出スヲ求ル爲ナルヘシ然ラハ我汝等ニ示ス物
アリ是ハ何トヤトテ袖中ヨリ出シタル物ハ各所ノ樊籠ヲ縛シタ
ル古キ藁繩ノ疣結ト稱スル品ナレハ衆其意ヲ解セス暫ク默メ居
タルニ退助聲ヲ張揚テ云フ憐ム可シ汝等未タ飢饉ノ何物タルヲ
知ラス予今之ヲ説聞サン夫レ飢饉ニハ百万食ヲ求メテ得可ラス
因テ糧ニ代ユル者ヲ求ムルニ穀ヲ生スルノ稿ヨリ佳ハナシ然レ
其藁一年ノ者ヨリ二年ノ者佳ク二年ノ者ヨリ三年ノ者ヨシ藁尽テ

後猶草根木皮ノ糧ニ換ユ可キ者アリ今予私邸ヲ出テ公廳ニ來ル
沿路樊籬ヲ見ルニ其繩三年ヲ經ル者皆依然ト猶此ノ如シ然ルニ
汝等既ニ發廩ノ遲キヲ迫ル是レ貯穀ノ有ルヲ恃ミ逸メ食ニ就カ
ンヲ求ル今今年如キハ穀價貴シト云フ可シ食物ナシト云フ可カ
ス故ニ力メテ四肢ヲ勞スレハ未タ必ス錢ヲ得サル可ラス且仲冬
ニ在レハ來歲麥秋ヲ待タハ猶五六月ヲ曠フセサル可ラス然メ米
庫ノ貯フ所一方苞ニ過キサレハ今ヨリ之ヲ發スレハ神領二万人
ノ男女何ヲ以テ來歲ニ至ルヲ得ン況ヤ救恤ノ法必ス老弱羸疾ノ
者ヲ先ニスレハ汝等屈強ノ者ハ序ニ於テ後ニセサルヲ得ス若シ
予言汝カ耳ニ入ラス乱妨狼藉公廳ヲ毀チ官吏ヲ傷ケ擅ニ倉庫ヲ
發スルトナラハ予ハ禁スル能ハスト說キシニ衆何ニ思ヒケン終
ニ語ナク後者ヨリ順次ニ退キ散シ日光終ニ一餓殍ヲ見サリシ此
更一時傳ヘテ馬場氏老成ノ美談トセルカ獨リ美談ノミナラス貯
藏ヲ司ル人并ニ穀ヲ積ム人共ニ心得トナス可シ

報知新聞
小言欄内

6お

玉垣額之助小話

安政ノ頃書ヲ以テ一時ニ行ハレタル中沢雪城氏ハ性來豪宕ニメ
角觥ヲ好ミ力士其門ニ出入スル者常ニ絶サリシカ或日兩國藥研
堀ノ居宅ニ於テ雅俗ヲ集會メ一大盛宴ヲ開クアリシハ當時東
西ノ大關不知火陣幕ヲ始メ幕ノ内ノ力士及ヒ年寄ノ諸士モ亦其
席ニ列セシカ酒酣ニ及ヒ或人不知火諸子ノ力士ニ向ヒ番附ノ上
段ヲ稱ノ幕ノ内ト云ハ何ノ故ニヤト詰問セシニ諸子速ニ答フル
能ハスハニ玉垣額之助班末ニアリ進テ曰ク是赤沢山ノ故更ニ起
ル河津股野ノ狩倉ニ諸士力ヲ角ラヘシハ勝タル者ハ幕ノ内ニ入
リテ酒ヲ飲ムヲ許シヨリ剛ノ者ノ一列ヲ指テ幕ノ内トハ云習
ハシハ故ニ此ニ居ル諸子ハ皆其御幕ノ内ニ十分ニ酒力飲メル
男共ト答ヘシニ人皆其古實ニ涉リテ年寄ノ名ニ負カサルヲ歎
稱セリト云フ玉垣子ハ原來某ノ藩士ニメ古今ノ史乘ニ通シ傍ラ
書ヲ能クシ且俳諧ヲ好ム相撲ノ句ニ

負多手をわねねハ相撲哉

雪踏ノ

昔シハ尻切ト云モノヲ用フ天正年中泉州境邑茶人千利休ト云モノ作意ヲ加ヘ雪ノ比茶會ノハ齒地入ノ爲ニ草履ノ裏ニ牛皮ヲ付サセ用ルニ雪ヲ踏ムト云箋ニテ雪踏ト名付ケタリトカヤ

調

頓阿

頓阿者聖相能實六世孫也少逃世居叡山修學惜後去台嶺入高野山性能和歌而遶其道時有淨弁慶運兼好之輩皆以和歌相稱世謂之四天王一日席上分題各得六首頓阿偶有支起席慶運窃取頓阿之題易其自所得者各書其歌六首悉佳矣慶運曰吾謀不善乎如此而後可以見奇才而已藤公良基子頓阿慨嘆歌道荒穢乃設問答著書一卷名愚

調

問賢註時阿七十餘歲矣先是自締艸廬於西行之旧隱雙林寺庵已

成日乃咏和歌而述追慕彼二月花下春之意卒年八十四

逸傳

鴻臚館ノ

劉翽曰鴻ハ大ナリ臚ハ陳ナリ大ニ禮ヲ以テ賓客ヲ序陳セシト

ナリ一説ニハ鴻ハ鳥ナリ臚ハ鴻ノ啼トキ聲ノ出ル所ノ腸ノ上

ニフクレ上リテ有ル之ヲ臚トイフ也異國ノ通交ヲ爲ス故ニ互

ニ聲ヲ相傳フルハ鴻ノ臚ヨリ聲ノ通シ出ルカ如シト喩ヲ以

テ付タル名ナリ一京ノ水王

車善七ノ傳

車善七佐竹義宣臣車猛虎弟也義宣之移封于出羽秋田也猛虎獨立不從及松平康重檢常陸地猛虎煽土民作乱欲以復佐竹氏旧封

覺爲康重被斬善七逃匿草野謂殺吾兄者康重也令康重殺之者

將軍也吾必爲報讎將軍者台德公也乃往遊江戶變名入府爲擊鞋
 奴常欲刺公者三手戰而不果公覺之執縛親詰善七具以狀對公曰
 義子能改心更吾乎善七日今日之復惟有死而已公益義之卒釋之
 善七拜謝曰小人不自量敢圖罪不容誅縱被寬舍臣豈抗顏與人相
 齒請去爲乞食之長於是被髮徒跣行乞于市遇衆乞有惠衆乞悅服
 久之善七以病死臨終謂其子曰吾嚮蒙將軍恩貸常念所以報之者
 故就衆乞中收錄勇敢才力者有年于此自誓國家若有緩急將與此
 輩顯場一戰死之今也不幸吾命在旦夕不無遺憾因令取一帖子干
 枕下卽乞人名簿也曰某者嘗更侯某以幹更稱吾擢爲百乞之長如
 是凡五六十人部伍井然隱乎一大堅軍也曰噫多少貔貅今無所用
 之逐投帖子于火中瞑目終聞者隕涕明良洪乾按藩幹譚

宗愨ノ話

爐

6.0

南宋ノ宗愨ト云フ人ハ先祖ヨリ儒ヲ業トシケルニ宗愨ニ至リテ
 武更ヲ好ンテ常ニ自ラ願クハ長風ニ乗シ万里ノ波ニ馳セント云
 ヘリ檀和ト云フ人賊ヲ討ツ前鋒トナル林邑國ノ王陽遇一國ノ
 人類傾ケ來テ戰フ其國ノ習ヒニ大象ヲ以テ敵ト戰ハシムルニ每
 度味方打負ケル宗愨云臣聞ク外國ニ獅子獸ヲ服セシム是ヲ以テ
 制セントテ獅子ノ形ヲ作り先ニ立テ相拒カシム戰ニ臨ンテ象共
 是ヲ眞ノ獅子ト驚キ人ヨリ先ニ逃ケレハ思ノ外ノ勝ヲ得万歳
 ヲ呼ビケリ一画典通考一

懷丙ノ話

懷丙ハ眞定ノ僧ニ天性智アリテ巧ナリ大河ノ中ニ浮橋アリ其橋
 ヲ鉄牛ハツヲ以テ維キタリ其一牛ノ重サ數万斤アリ宋ノ嘉祐年
 中ニ水暴ニ漲リテ梁絶ヘ鉄牛河ニ没シテ出テス之ヲ出スニ人ナシ
 若シ出ス人アラント募ラル、懷丙是ヲ聞キ爰ニ來リ我能ク牛ヲ

水中ヨリ揚ケント請合大船三艘ニ土チイカ計リモ實テ、牛チ夾
ミテ是ヲ維イテ大木ヲ權衡ノ狀ヲナシ牛チ釣リテ徐カニ舟ノ中
ニ入レタル土チ去レハ舟次第ニ浮ムニ寄テ牛引揚テ浮ミ出タリ
轉運使張壽是ヲ奇ナリト奏問シケレハ紫衣ヲ賜リケリ(同上)

雪隱ノ
雪人名隱寺号昔時雪寶禪師在靈隱寺之日以司廁之職故名雪隱義
堂空華文集第九賀淨領軸序云古之宗門祖師發心入道必先歷試諸
難而役干雜務職々之最卑而人所甚惡莫過乎持淨然若雪寶明覺居
衆司此職干靈隱至今有雪隱之美稱干雪寶者明覺禪師所住山号傳在
之職臨安府持淨丈清規也司廁(櫻陰腐談)

馬山開見記
以下三件ハ余カ有馬溫泉ニ入浴中親シク土地ノ變狀ニ付キ

12⁰

6⁰

聞見セシモノニ些サカ風土ヲ察スルニ足レハ是ニ記ス
有馬溫泉ハ元ト行基菩薩カ藥師如來ノ託宣ヲ蒙リ開キ後洪水ノ
爲メニ退轉スルヲ九十五年建久年間ニ至テ吉野ノ僧仁西上人熊
野權現ノ夢想ニテ平維清ノ維盛ト計リ溫泉ヲ再興シ十二ノ坊舎ヲ
建ツ蓋シ藥師ノ十二神ニ掌ルト云フ皆維清ノ末裔ニ其系圖
ハ桓武天皇以來連綿トノ今日ニ至ルモノ、如シ所ナキニ非ス
後八坊ヲ加ヘテ二十坊トナルト坊舎猶溫泉宿坊舎各ニ婢アリ一
老湯女ト云ヒ一ヲ少湯女ト云フ老少ヲ問ハスノ皆眉ヲ剪リ齒ヲ
涅シ夫アル者ニ擬スト云フ蓋シ浴客ノ淫行ヲナシ爲ニ攝生ヲ誤
ランヲ防クナリ湯女常ニ浴室ニ在テ乱浴ノ際其浴衣ヲ護シ若
シ一人ノ出浴スルアレハ直ニ其浴衣ヲス、メ誤テ他ノ浴衣ヲス
スムルヲナシコレ習慣ニ由テ之ヲ記臆スルノ法ヲ得タルモノナ
リ廿坊ノ少湯女皆定傳フルノ名アリ

雪隱ノ
雪隱ノ

12⁰

御所坊 模女 奥ノ坊 夏女 伊勢屋 竹女 中ノ坊 常女
 尼崎坊 杉女 稱宣屋 杉女 大門 初女 角ノ坊 蘿女 上
 大坊 栗女 若狹屋 市女
 池ノ坊 松女 下大坊 鍋女 休所 武女 川崎屋 弥女 萱
 ノ坊 紀以女 川野屋 満女 大黒屋 竿女 素麴屋 藤女
 兵衛 小夜女 水船 辻女
 湯女 古へハ四十三石餘ノ朱印ヲ持シ諸藝ニ達セシ者ニ非サレハ
 用ヒサリシト云フ
 馬山六景ト云フハ鼓瀧松嵐、有明櫻春望、巧知山秋月、落葉山
 夕照、温泉寺晚鐘、有馬富士雪、ニノ其他勝地多シ有馬名所歌
 ニ曰ク
 有馬名所は藥願、愛宕富士の朝霧龜尾の鼓、瀧や落葉山清水
 稻荷鳥地獄糸細竹細工一の場と二此場とのゆつぱり入たひ奈

竹細工ハ近頃海外ニ輸出スル事多シト云フ
 有馬川原破竹ヲ列ネテ日光ニ曬ラシモノラ見ルリテ竹細工ニ用ヒンヤリト力
 産物ハ糸細工竹細工人形筆ノ如キハ能ク人ノ知ル所ナリ湯染
 手拭布有馬温泉ハ鉄氣アルヲ以テ臭氣ヲ帯ヒ其色赤シ故ニ綿
 アリ又越天樂ト云フモノアリ昔シ鳥丸光廣卿此地ニ遊ヒ入浴
 ノ暇マ笙ヲ吹テ樂ヲ奏ス會マ土人歎冬ヲ賞テ之ヲ進ム卿之ヲ
 食スルニ味甚佳ト其名ヲ問フ土人云フ定名ナシ願クハ名ヲ命
 シ玉ヘトアリケレハ卿取敢ヘス吾今越天樂ノ一曲ヲ終レリ之
 ヲ以テ名ツケント終ニ此名アリ又近頃炭酸水ヲ發見ス其近傍
 ノ地鳥地獄地獄谷ノ稱アリテ鳥虫ノ類多ク之ニ死スルニ由リ
 人ノ之ヲ毒水トセシモ今炭酸氣ノ夥キニ由テ然ルヲ知ニ至レリ
 一月二日ヲ此地ノ大祭トス浴客多ク夏期ニ在アルヲ以テ外來ノ人
 來テ是ニ越年シタルヲ以其儀式左ノ如シ第一ニ旗幟ノ類行キ
 テ此大祭ヲ見ルヲ得タリ興行ク祠官之ヲ護ス次ヲ開山行基中
 次ニ湯泉神社少名彦命ノ興行ク祠官之ヲ護ス次ヲ開山行基中
 奥仁西兩上人ノ像トス僧侶之ヲ護ス之ニ從フ者村人中名望ア
 ル者トス一列市街ヲ一周シ先ツ一ノ湯ニ至リ祠官ハ祭文ヲ朗

誦シテ後神輿ヲ湯ニ浴サシメ次ニ僧侶ハ讀經ヲ終リテ祠官僧
 侶共米粒ト小紙片ヲ散布シテ去ルニ湯モ亦此ノ如シ之ヲ終
 テ湯女十數人手ニ青松ヲ携ヘ浴室ニ入りテ米粒ト紙片ヲ拾フ
 其拾フノ多寡ニ由リ一歲中收入ノ多寡ヲトストテ皆競フテ
 之ヲ拾フ此式ヲ入初ノ儀ト云フ之ヲ終リ湯女湯室ノ兩側ニ并
 列シテ唱歌ス之ヲ謳ヒ初ト云フ
 老湯女ノ唱歌
 枝ささあゆる若緑り青海けけの御代そ久しきを
 少湯女ノ唱歌
 瀧の白糸いとしてなをむゆるせぬしほる我が袂落葉山こそ
 名所なきえよんがいな
 右終リテ各湯女旅舎ニ至テ大呼シテ云フ「京大坂兵庫播磨日
 本國中ノ御客様只今御湯ニ御召ナサレ」是ニ於テ大祭ノ儀式
 終ル

湯女ノ歌
 老湯女ノ歌
 少湯女ノ歌
 瀧ノ白糸
 名所なき
 右終リテ



